

佐嘉城下に來住せしより、此處を唐人町と稱せりとあり、斯くて子孫代々藩用の荒物及唐物屋職として、歷代世襲せる由にて、其由緒書なるもの左の如くである。

御用唐人町荒物唐物屋職御由緒之次第左の通

一元祖宗歡儀（姓は達名は越字は宗歡吉州の刺史達賢の子半弓を能す）高麗國竹浦の陸川崎と申所の産に而文を學武を練（大明萬曆十五年「我天正十五年」）春三月中旬家族を引牽し海濱に遊漁す俄に大風高波起り立漁船洋中吹流漂事幾日既に食盡き飢て爲死干時天道の助を得一小鯨船に飛込み是以て飢を扶け万里の波濤を凌ぎ終に筑前黒崎の濱に主從七人漂着す所の漁夫集合して頻に令揚陸食を與へ介抱す漸危難を逃れ仍而所の長宰官厨に訴官厨哀痛深かく衣食を賜り長宰の別業に止宿せしむ其内親戚家族疾を請段々死亡す宗歡獨り残りて悲歎紅涙に沈む漁夫等爲

慰の或時は網を張或時は釣を垂れ鬱方を散せしむ于時日本天正十九年辛卯漁夫太藏と申者案内に而太宰府に參籠して身の無事を祈る此時肥州の太守龍造寺の御親郷龍造寺七郎左工門家晴様成富十右工門尉茂安様御登阪御歸路の砌御參詣漂流の始末粗御聞届御用有之由に而官厨御届の上佐嘉御連歸家晴様御館被召置衣服並御扇子等被爲頂戴頓而被召連御登城直茂様へ御目見被仰付御懇の蒙上意其後上々様方被爲御目渡難有奉存候且又段々御家老様方御屋敷へ御介副御役人御附副罷上り候處何方様も珍敷朝鮮人と被仰御面談御手許近く被召寄候而種々御饗應被下物等色々頂戴仕候然末直茂様被爲召御直朝鮮八箇道の海陸嶮易人民の強弱其外御尋に付差圖申上候處於本國父母妻子あり哉又歸國の望有之哉御問尋に付有因忍夫而慈母早世仕未妻子の養無夢仕候且遙に洋海を隔漂流の某歸郷の期難斗日本神

國因縁有之と相見候に付願は御慈悲を以御國の民と被成度奉願候處甚御感悅被遊候被仰下りて將軍太閤殿下朝鮮御征伐被仰出加藤清正一列御先手蒙仰候然處異境の淵底御不案内に而御軍議難被爲御行届某儀生國事別候者に付至彼地諸御用の品々調献第一御軍中の儀不殘心底申上抛身命御奉公仕候様追々御勝利の上は一際御褒美可被仰付と御意難有御請仕引取候事

一其後毎々御軍議御座候末席被召出御問尋事等不  
少候處一々奉申上就中朝鮮入箇道の見取繪圖御認候毎日出勤被仰候に付罷出入箇道の山川嶮阻行程其外巨細に奉申上候事

附大小袴着用仕候様被仰候に付家晴様より御大小一腰十右工門様より御袴被爲拜領着用出勤仕候尤被召抱候に付宗歡姓名在名を名字にして川崎清藏と名乗候様被仰付難有奉存候事  
一翌文祿元壬辰三月朔日朝鮮御陣御首途尤直茂様

には三月二十日より御馬廻り斗りに而國一丸御乗船御引揚被遊御登駕宗歡儀御本船御側近く被召寄日夜朝鮮國の振合御乗船の砌も猶又御尋に候不殘心底奉申上候に付被遊御感悅候事

附り御首途の節拜領仕候なめしがはおごし 威具足大小帶半弓所持御供仕候

一同月下旬朝鮮釜山海浦竹島へ御着船慶州道の五大將奉防之依之烈敷御合戰其末竹島と申處へ御放火奉敵者共不殘御切捨御手始御軍神御血祭被遊候某王城其外御案内仕於所々御合戰無絶間上様初め御軍勢御血戰絶言語候次第右御陣中御用の品々不少候所時々調献仕或は商人に相成敵の城内へ忍入敵の軍慮強弱多寡兵糧玉藥等迄依御意掠取日夜抛身差働候事

一文祿三甲午正月太閤様御朱印到來日本の諸軍勢一先被召歸候由に而御供仕罷歸候事  
附諸侯方始永陣に而至極御難澁殊に疾來病死

の御向々不少段相聞一先御歸陣被仰此段内々

承知仕候

一文祿五丙申大明日本の和議不調に付里て大軍朝鮮被差越候に付直茂様より御先に勝茂様伏見より御下向同十月二十日伊萬里より御出船に付未だ御若年殊に御不案内に付諸御用辨として宗歡儀御供被仰候に付隨分精を入御奉公仕候様蒙御意御請申上御供仕候事

附かざもと風本(勝本)に而御越年慶長二丁酉正月無御滯御渡海被成慶尙道金海竹島昌原の城に御入被成候

一直茂様にも追々被遊御渡海候處同三月太閤様御用に付又々御歸朝同七月始竹島昌原の城に於て御父子様御對顔御互に御無事御悅被遊宗歡儀被爲召直茂様より永々忠勤神妙の段被遊御意御茶出御用被仰候依之唐燒のキビシヨウ奉獻の候處殊の外御吹聽被成燒物一通製作の御法等委敷

御尋に付一々奉申上候處兎角御歸陣の節と被仰殘御暇被下候に付御前を引取候事

一宗歡儀元來高麗の産に而日本朝鮮の言語好く通じ候に付依御意日本衣服に相改彼國の製作衣裳を用ひ商人と御仕立所々の城郭忍入陣中當用の品々賣歩行敵方の謀計の次第は不及申軍勢の多寡剛弱兵糧の多少其外見積り御直に申上候様被仰付唐津(康津か)加羅山蔚山其外所々御合戰の砌敵方に忍入存分見聞仕候得共專朝鮮言語と申衣裳唐製着用仕候に付彼國の商人被見請咎候者無之併諸家の間人は數多被召捕切害逢候もの不<sub>レ</sub>少候尤南京城攻の節城中忍入罷在候處大明の大將軍李移男より被見咎懷中穿鑿に逢候處日本の書簡致所持候に付稠きび敷責訊禁獄及數日不相晴既に可爲切害相究り候由内々承り付無是非場合に其夜銀錢壹貫文番兵へ與へ申欺獄屋を拔出御本陣直様被歸候眞に萬死を出候段御感悅被遊候事

一 太閤殿下御病氣の末御他界被成候由に而慶長三  
戊戌十二月御歸陣の刻賊船數百艘奉慕候を御討  
散御引取同十二月筑前博多へ御着直様御登阪に  
付御供仕罷在り大阪京都其外に初而見物被仰付  
難有奉存候事

一 慶長四己亥四月御暇に而直茂様御歸國御供仕罷  
歸候處唯今住居仕候場所へ居宅仕候様被仰付宗  
歡唐土の産に付町號を唐人町と御附被下御扶持  
（十人御扶持）被爲拜領朝鮮御陣中諸用物相調候  
御吉例を以御内外御用荒物唐物一手に相納御用  
屋職を以無退轉子孫相續致繁榮候様御意の赴家  
晴様御書取御披露の上御印を以被爲戴冥加至極  
奉存候事

附町號唐人町より御附住居被仰付候儀宗歡儀  
高麗の産に而朝鮮御陣の刻厚盡忠節仕候儀永  
末に相顯れ候通難有御賢慮の赴家晴様を以被  
仰下候に付乍憚御同人様に而御禮奉申上候儀

佐賀系大川内窯

又手始並御參勤御往來共被爲渡御目御酒拜領  
被仰候に付御吉例を以キビシヨウ御茶出代々  
奉獻候通被仰有之候

一 前に書載候通キビシヨウ御茶出奉獻候砌陶器製  
作の儀御尋に付委奉申上置候處追々被遊御歸陣  
候段相決候に付御内々宗歡被爲召御歸陣の上爲  
御國産陶山御仕立被成度被思召上候依之右細工  
仕候者密々相機買連歸候道は無之哉と被仰含候  
に付吉州より西南に當り金望山と申所へ南京細  
工方功者の者共罷在候を八人日本渡來永住陶山  
革創の儀様々申諭し連渡御國所の山々試燒仕終  
に有田皿山三國一の細工土見當り燒立候以來御  
國第一の御寶産と相成候尤其内一人至熊山相果  
申候右の通陶山御仕立の基本は宗歡儀朝鮮より  
細工人連渡候に付日本名産と相成候御由緒の次  
第御吟味の上珍敷家柄の譯を以慶長十六年辛亥  
年荒物燒物一職商賣被仰付其段市中御觸達に相

成十四町の別當中承知の印形御取被下置の段々御高恩の程冥加に餘り候次第に付其節被爲下置候御印の御墨附相副御扶持方の儀は差上地行御用屋職並右一職を以相續仕候事

一 二代目川崎助右工門儀寛永十五年戊寅島原切支丹御征伐の刻御軍勢被差越候に付出張被仰付御陣場罷越候所敵方より出候矢胸に立候其時圓鏡懷中に在り候故右圓鏡に矢當り助命仕御軍用の麻苧同繩蓆筵其外一切御用の品々尖さきに相納御辨相整候尤右圓鏡於御陣所燒相捨候由右助命仕候吉例を以手始圓鏡の儀乍丸燒相用候嘉例相成居其節の矢の根干今持傳來候事

一 於御城御能御座候節は拜見被爲仰候晝飯とも被爲拜領成候に付去る文化四年卯九月御能の節跡方比竟拜見奉願候處元々方御役福田庄藏様より被御達候は如先規拜見被仰候に付明六ツ時被出元々方釣合候様尤御時節柄に付晝飯の儀は不差

出段御達成爲拜見罷出候事

附御先代様御入部の翌年御能御座候節も如跡方拜見被仰付候緒又年始並御參勤御往來と被渡御目御酒拜領仕献上物の儀は吉例を以キビシヨウ御茶出差上來候得共五代目勘四郎代唐渡無之に付三本入御扇子に被相替其後はくま白麻(麻を原料として抄造せし白紙)に被召成尤轟木の儀は打追三本入御扇子名御披露に而被爲御目渡來候事

一 巡見御上使御下向の刻は跡御用の品々諸納方は不及申御領中附廻り勤代々被爲仰付來候手代人召連候へば二人前の旅籠雜用代被渡下偕又御用品長持入組に々持運候に付長持二棹借物に々被差出持夫八人被差出來候事

附寛政元年御下向の刻は七代目勘右工門へ被付跡方諸御用尖相勤候天保九年成年御下向の節も跡方の通相勤來候事

一文化十四丁丑松原御神社御再興の儀被仰出候代々御重恩の家筋に付爲冥加唐金の御手水鉢奉獻候儀奉願候處其通被仰付後見塘勘平儀奉獻候難有奉存候勿論前々より家筋御由緒の次第毎々御尋に付其時々御達申上置候就中右手水鉢奉獻奉願候刻尙又御由緒御尋に付太圖御達申上置候事附去る寛政七年卯正月九日夜本宅並抱屋敷共類焼に逢抱屋敷の儀は火元近く諸御役所年々御用の品々買込商家に持廻罷在候處不圖右の出火に付先以本宅は差置抱屋敷の方早速駈付相防ぎ候得共皆以及焼失本宅の儀は火元よりは數軒相隔居候に付取片付猶豫仕抱屋敷を重に仕候處俄に風替り本宅へ飛火懸り裏行手狹有之候得共外に運出候向無之無余儀宗歡被爲下置候御書其外一番に持出置候處風並惡敷跡御用品並諸道具に火移り猛火烈敷持出置候長持入皆及焼失甚殘念千萬に奉存候依之數代連

佐賀系大川内窯

續仕來候御用屋職及潰候外無御座參り懸に付格段御慈悲を以御拜借御救被下御蔭を以不相替御用屋職相勤罷在難有奉存其節及焼失候品々太圖書留相成居分左の通

一直茂様拾通勝茂様五通其外様より宗歡被爲下置候御書〆貳拾參紙並拜領の韋威鎧壹兩敵方忍入候節懷中仕候九寸五分一鞘並南蠻鐵の鎧三兩朝鮮より持渡り重寶仕候事

一朝鮮御陣御首途の節八幡社天滿宮御守錦袋入〆被爲拜領候御守掛右同斷

一拝領の御上下に御衣裳に偕又上々様御家老様方より拝領仕候御紋服並御扇子御盃其外諸品々長持一棹右同斷

一直茂様より御用荒物唐物屋職御吉例を以代々被仰候段上意家晴様書取御披露の上御印の御書を以被爲下置候御書等箱入の儘右同斷

一御由緒書の儀は箱割損じ濡浸有之候へど見當り

候に付早速板にひろげ干立候得共年久敷相成紙  
切れ損し剝取候儀不相叶に付無余儀其儘寫取候  
併紙ハラ〜仕飛散文字讀兼不行届甚以残念奉  
存候事

一宗歡日夜鍛練仕候半弓並征矢外高麗持渡來候品  
々右同斷

一宗歡以來持渡來候家財諸道具一切皆以丸燒仕當  
惑千萬奉存候事

右の通に御座候 以上

天保十年寅六月 御用荒物屋勘四郎

以上の由緒書に依れば、宗歡は韓國八道の地理  
を明かにし、然も重要な任務に當りたるは、戦役  
史上特筆すべき出来事なるに、從來嘗て其名前さ  
へ知られざりしのみでなく、適々其恩賞としても  
僅に拾人扶持位に過ぎない。而して當人も亦之に  
甘んじたるは、洵に氣の毒に堪へない感がある。

なほ唐人町の鏡圓寺に、彼の墓碑を訪ぬれば、

川崎家の墓と稱して、相當加工されたる石碑があ  
り、蔦蔓覆ひ搦めるが、十基許り並んでゐる。そ  
して一番右の端が宗歡の碑にて、明暦元年七月二  
十三日（二百八十一年前）として、了喜宗歡信士  
と記されてあり、並びて光月好泉信女とあるは其  
妻であらう。

次に松原神社の門を潜れば、右側に口徑二尺五  
寸位にて、下は小さく朝顔形になりし青銅の手水  
鉢があり、それには文政元年寅年八月（百十八年  
前）御用荒物、唐物屋、唐人町川崎勘四郎と鑄ま  
れてある。猶他に明治六年二月奉獻の、青銅製狛  
犬の臺側に、三十三人の寄附人名を鑄まれあるが  
中に荒物屋勘四郎の名前があり、兎も角川崎家は  
當時有力なる商估なりしに相違ない。

然れども前記由緒書の中に、有田の磁器創作者  
は、直茂の希望に基づき、宗歡に依つて渡來され  
し云々の記事に至つては、其余りに大いなる疑團